

近世刊行大坂図集成

【出版記念座談会】

編集作業に5年以上を費やし、2015年7月に満を持して刊行された『近世刊行大坂図集成』。



1975年香川興生生まれ。京都府立大学文学部准教授。著書に『江戸知識人と地図』京都大学学術出版会、『地図から読む江戸時代』筑摩書房、など。

近世刊行図の系譜をより大きなスケールで見てもらえると思います。

目標としての故失守一彦先生

島本 さきほど小野田さんが、今後も新しい図がどんどん見つかるのは当然だと言っていました。本書の編集にも、これまで知られていなかった多くの図が発見されたことですね。

上杉 「大坂図」なので、うまくいけば関西だけで集められるかも、と初めは思っていたんです。しかし大坂図は思った以上に全国に流出していました。結局、関西はもちろん、関東、東北、中部の大学や図書館、博物館を調査し、果てはカナダやオランダからも図版を借りることになりました。

小野田 新しい図の発見ということでは、東京の三井文庫での調査結果が良い意味でショッキングでしたね。それまで見たこともない、系統が分らないような地図が次々と出てきましたから。

島本 でもそのおかげで、失守一彦先生をはじめ、先達が調査した地図や解釈をもういちど一から見直すきっかけになったのではないのでしょうか。これまでの研究を自明のものとしてそのまま接ぎ木をするのではなく、土の底から掘り返し、改めて地図や過去の研究成果をどう位置づけるかを考えることができたわけですね。

小野田 たしかに僕としては、恩師の失守先生を超えなければならぬという思いはありました。大坂図の研究者といえば、栗田元次先生や、さらにさかのかのぼると佐古慶

三氏もいるわけですが、直近の大家は失守先生です。個人的には僕の院生時代の指導教官でもありました。

島本 関西大学の大学院時代ですね。

小野田 そう……です。ですから、失守先生の成果を影りましてさらに一歩先に進みたいと思っていました。先生が著書『被差別別名』を削除修正して掲載しなければならなかったことも、克服したと思っていました。

上杉 矢守先生の最大の業績は、日本の都市図をばらばらに解体して、体系的に再構築したところだと思います。先生の業績以降の四半世紀、個別の研究はあるんですが、古地図を体系化するという作業は、都市図研究はほとんどないんです。それこそ小野田さんと好さん

の『図説 日本古地図コレクション』(河出書房新社、2004年)や織田武雄先生の『地図の歴史』(『世界篇』日本篇、講談社、1974年)くらいじゃないでしょうか。

小野田 上杉さんの仕事もあるじゃないですか。

上杉 ええ、たしかに歴史地理の学界では2000年代後半から再びこれまでの研究をまとめる試みが始まっています。僕も『日本地図史』(金田章裕と共著、吉川弘文館、2012年)で近世以降を担当しました。しかしその執筆でも痛感しましたが、都市図となると、何を書くにも「失守によれば……」になってしまうんです。だからこそ、より多くの図を調査して体系化した今回の『大坂図集成』は、大坂図に関しては失守先生を超えた自信があります。また大坂図にとらまらず、地図史研究全体の流れを塗りかえる重要な仕事だという自信があります。

島本多教氏

1990年香川興生生まれ。日本学術振興会特別研究員・京都府立大学大学院文学研究科専攻(地理学)博士後期課程。著作に『近世刊行大坂図の展開と小型図の位置づけ』人文地理 65巻5号、など。



小野田一幸氏

1965年和歌山県生まれ。神戸市立博物館学芸課長、学芸員。共著に『紀州藩士酒井伴四郎関係文書』清文堂、『図説 日本古地図コレクション』河出書房新社、など。

どのようにして企画となったか

島本(司会) ついにというか、ようやくというか『近世刊行大坂図集成』が刊行となりました。本当に長い道のりでした。私が本書の編集の前提となる大坂図の研究に参加したのは2011年にさかのぼりますが、じつはそれ以前から、すでに調査は始まっていたんですね。あらためて、今回の大坂図調査の経緯を簡単に紹介します。

小野田 近世に地図出版が盛んだった京都・江戸・大坂の三都のうち、これまで江戸と京都は、完璧とは言えないまでもかなり充実した都市図目録が作成されているのに対して、大坂だけは、どうも地図の情報が足りない状態でした。

島本 たしかにそうです。

小野田 僕はそれが気になっていて、2001年に大阪人権博物館で開催された特別展『絵図の世界と被差別民』に関わった頃から、大坂図を少しずつ調べはじめ、目録化していったんです。本格的に書籍にまとめることについては、5年ほど前、創元社の山口さんからお話をいただいたのがきっかけです。初めは集成などとは考えていなくて、これまでの研究の不足を少し補完できればというほどの、軽い気持ちで考えていたんですが……。まさかこんなに大変なことになるとは(笑)。

島本 えーっと、出版企画書の提出は2011年4月の日付になっていますね。それからさらに5年強……。

上杉 しかし、それではいつまでも出版できないので、大坂の陣四〇〇年記念の2014年を区切りしようということになったんですよ。

小野田 ええ。冬の陣を目指して、どんなに遅くとも翌年の夏の陣四〇〇年までには、京都や大坂の都市史にも詳しい脇田修先生にお願いしたわけです。

島本 そうしてこれらの執筆者が揃ったことで、地図史だけに留まらず、都市史、出版史、文化史、社会史と、近世刊行大坂図を結ぶ点として幅広いテーマを扱うことにもなったわけですね。収録図の種類についても、『近世刊行』と銘打った図、刊行図だけではなく、手書きの絵図や近代の地図も一部含まれているのが面白い。

上杉 そうして僕が、当時まだ学部3年生で、僕のゼミで小型図や地図出版に興味を持って勉強していた島本君を誘いました。やはりたまたま地図を集めて載せるだけではなく、きりと研究にしたいという意味がなくて、そのために必要な人を集めていったんです。総合的な監修は、近世史の大家であり、京都や大坂の都市史にも詳しい脇田修先生にお願いしたわけです。

島本 そうしてこれらの執筆者が揃ったことで、地図史だけに留まらず、都市史、出版史、文化史、社会史と、近世刊行大坂図を結ぶ点として幅広いテーマを扱うことにもなったわけですね。収録図の種類についても、『近世刊行』と銘打った図、刊行図だけではなく、手書きの絵図や近代の地図も一部含まれているのが面白い。

小野田 木版印刷の近世刊行図と手書きの町絵図の比較が必要だと思って、鳴海さんにコラムを書いてもらいました。また明治以降の地図にも近世刊行図の影響が見られるので、それがよく分かる系統の近代図を選んで、吉村さんに解説してもらいました。前後の時代の地図も参照することで、



現存する最古の刊行【板行】大坂図(ブリティッシュ・コロンビア大学図書館蔵)

古地図出版の慣習を塗り替える試み

島本 地図史研究の流れを塗りかえたと。島本、もう一点、あくまで地図史研究の図録でありながら、古地図に記載された被差別身分に関する記述を「カ所た」とも変更することなく収録したことは、非常に画期的だったと思います。

小野田 さきほど触れたように、これまで古地図の出版や展示の際には、地図中の被差別地名を隠したり、その部分をトリミングするというような、いわば歴史資料の歪曲にあたる行為が頻繁に行われていました。ですから、2001年に大阪人権博物館で、資料の改変を一切行わない『絵図世界と被差別別名』展が開催され、その展覧会図録である『絵図に描かれた被差別別名』が刊行されたことは、地図史研究の中では大きな出来事だったんです。あの展覧会と図録を一回りのものとしてはたいたくないと常々思っていたところでの、商業出版企画のオファーだったわけですね。

上杉 この図録には、小野田さんや当時大阪人権博物館の学芸員であった吉村さんも論文を寄せていたり、単に記載されている事象だけでなく、そこに込められた世界観を読み込んでいくという研究がなされていく。僕たちは研究会に通っていたわけじゃないけれど、地図だけではなく、もっといろいろな観点からの文脈を考慮して総合的に解釈していくという手法は、今回の研究にあたって意識的に取り入れたと言っているかもしれません。

上杉 特に個別の図の解釈ではそうなんです。葛川研究会のアプローチは「地図史」であって、失守先生のような「地図史」とはまた違う軸なんですね。いわゆる記号論による地図解釈です。文書史料がないなかで、地図を史料としてどのように読み解いていくかというところから、地図に表れた図像を丹念に読み解いていくという記号論的アプローチが生まれました。

小野田 黒田日出男先生の歴史図像学の地図バージョンみたいな研究が、1990年代前半くらいまで流行したんですよ。上杉、ですから僕を含め、絵図研究会のその次の世代の研究者にとっては、記号論的な解釈はもはや当たり前になっていました。むしろ僕たちは、記号論だけに頼るのではなく、文書などの資料も読んで、当時の社会情勢と地図から読み取れる文脈を合わせて解釈しようという立場を取るようになったんです。

島本 つまり、地図の系譜をたどり体系化する「地図史」と、個別の図に表れる事象を詳しく読み解く「地図図論」の、二つの研究方法がクロスオーバーする本書の研究方針は、これまでの地図図研究のトレンドを考えると必然だったわけですね。

上杉 そうです。

島本 資料を歴史的、社会的文脈と照らし合わせて、さまざまな切り口で研究するというのは、書誌学や文字学、それをふまえた歴史学なども当たり前に行われていますから、地図研究だけという限り、人文科学全体の傾向と言えるかもしれません。

小野田 織田さんと一緒に、本書で「系統樹」として刊行大坂図の系譜を経糸(たていと)とすると、それを「政治」とか「出版」とか、どの観点から読み解くかという切り口が緯糸(よこいと)。2つが織り合わさってひとつの研究になります。

上杉 ええ。しかも古地図を政治史、あるいは文化史のなかで読み解く研究は、今までにもありましたが、大坂図をより広い社会史と明確に結びつけて詳しく論じたのは、本書が初めてではないでしょうか。

島本 私もここまで明確なものは思いつきませんでした。

上杉 社会史と結びつけた地図解釈を考えた、今回の研究で板元論、つまり刊行図の出版元の動向に力点が置かれたのは、当然の流れだと思います。

小野田 大坂図の系統を調べるのにも、木屋間の記録が非常に役に立ちましたね。

上杉 図面をひとつひとつ読み解きながら

上杉 『大坂図集成』は、大坂図に関しては失守先生を超えた自信があります。また大坂図にとらまらず、地図史研究全体の流れを塗りかえる重要な仕事だという自信があります。

上杉 今回の本がさらに画期的なのは、先人の展覧会図録と違い、人権をテーマにした専門書ではなく、あくまで歴史地理学の図

録であるということですね。そのうえで、差別や偏見がいかに歴史的に形成されたかを理解するためにも、古地図の記載内容は一切改変することなく掲載しました。そのひとつの証として、このテーマに真正面から取り組んだ論文も収録されています。

島本 小野田さんの『刊行大坂図』にみる非人村記載をめぐる「です」。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

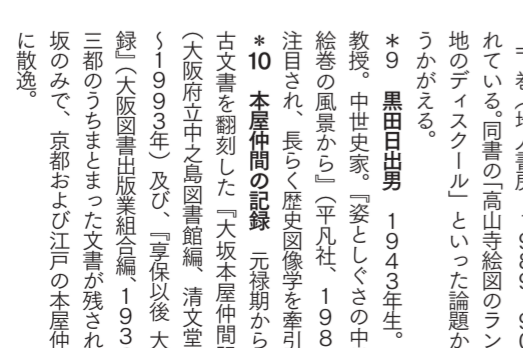
上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。



編者の上杉氏の共編著『日本地図史』(吉川弘文館)



毎日新聞社から刊行された『大阪古地図物語』



2001年に大阪人権博物館で開催された展覧会の図録

上杉 今回の本がさらに画期的なのは、先人の展覧会図録と違い、人権をテーマにした専門書ではなく、あくまで歴史地理学の図録であるということですね。そのうえで、差別や偏見がいかに歴史的に形成されたかを理解するためにも、古地図の記載内容は一切改変することなく掲載しました。そのひとつの証として、このテーマに真正面から取り組んだ論文も収録されています。

島本 小野田さんの『刊行大坂図』にみる非人村記載をめぐる「です」。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。

上杉 被差別身分の問題を正確に認識し、地図史・都市史に位置づけたことは、とても重要だと思います。やはり、都市を研究しようと思ったら、この問題を抜きにしては語れませんから。



合文の例：「摂州大坂大図」全(外題)「個人蔵」より



ら、社会史ともつぎ合わせて考えていくうえで、地図の製作者の存在は無視できない。出版という観点で調べていくと、地図と政治との深い関わりが見えてくる。当時の都市政策が、一般の人が使う地図の刊行にも大きく影響していた状況が分かってくるわけだ。

島本 なるほど。

上杉 たえば大坂図や江戸図には武鑑の類が細かく書き込まれていますが、京都図にはあまり書かれていません。これだけでも、当時の都市の役割や性格が見えてきますよね。18世紀の大坂が政治的・軍事的にも非常に重要で、武士の町という側面もあったことが分かります。

小野田 武鑑や蔵屋敷などの情報を盛り込むため、合文が用いられた。初めは各



コラム「播磨屋の修正作業」より、図版の一部(神戸市立博物館蔵)

***13** たとは「新板大坂図」「原図」の場合、明暦3年(1657)の年記のものが最も早く、それから約90年間、板元を交わつて14種(複製を除く)が出版された。その間、大坂市の中核地帯が、坂元板元の異動といった変化がある程度反映されている。

***14** 大坂城代、幕府の職名で、大坂の諸役人を統率し、大坂城守衛や西国諸大名の監督にあ

た。武鑑、江戸時代の大名・幕府役人の情報を収録した名鑑。

***12** 合文、武鑑や武鑑などの情報を記号とともに記載された対照表。地図面には記号のみを振って置き、合文と照らし合わせることで、各等の宗派や蔵屋敷の持ち主などを特定できる。

島本 それだけ読者がこの情報を重視し、最新版が求められたということですね。

小野田 その通り。こうして元は同じ板でも、細部に修正が加えられ、多くのパリエーションが生み出されることになりました。かと思えば、大坂城代が代わっても、いつまでも修正されずに放置されているものもある。それぞれの地図の用途に応じて、対象読者にとって重要な情報は頻りに更新されますが、そうでない情報には無頓着なわけですね。各図の特徴や改板時に刷り直されている部分を調べていくと、板元の販売戦略や読者の需要まで、ある程度推測できるわけですね。

島本 刊行図はあくまで商品であり、ひとつの図を板木から作るにはかなりの手間とお金がかかる。同じ板をできるだけ長く使いつつ、誤りや古い情報を効率よく修正するための工夫がなされていたんですね。

上杉 板木の修正に関しては、解説編コラム③に詳しく書きましたが、播磨屋の一件が面白かったです。播磨屋九兵衛は19世紀前半の大坂図出版の最大手でしたが、おそらく出版許可が下りる前に、増修改正摂州大坂図(増修改正工一)を印刷して、出版直前になって、お上からクレームがつか、あわてて修正をしたというものです。現在確認されている同図には、きちんと板木から修正されているものと、印刷済みの地図に上から紙を貼って書き直したものとがあり、修正作業はかなり慌ただしく行われたことが想像できます。お上から訂正命令が出たことは「大坂本屋仲間記録」の「出勤帳」に記載があり、2種類の異なる修正版を比べることで、その実態が確認できたわけです。文書と地図資料の相互研究が交差した例でしたね。

島本 「大坂本屋仲間記録」には、ほかにも大坂図の板木の帰属をめぐる本屋同士の間争論の記述がありました。そうした記録を踏まえて、刷られた地図から板木の状態

を推測し、板木から板元、つまり出版者の意図を推し、当時の社会の動きを読み解く作業は、スリリングでとても面白かったですね。

原図調査環境の向上

島本 僕にとって今回の調査が一番面白かったのは、同系統の地図を数多く比較する作業の中で、地図を見るたびに、常に新しい発見があったということですね。そう同じように見えない図でも、よく見ていくと表裏が異なる部分があったり、印刷時の汚れや板木の継ぎ目の違いがあったりなど、本物を間近に見ることの大切さを再認識しました。

小野田 刷り板の違いといっても、パッと見ただけでは気づかないようなごくごく細かい違いなんですね。そういう小さな相違点を見つけるために、地図を複数の目で見ることは重要だったと思います。ひとつで行なう研究では、どうしても見落としや思い込みが出てくる。今回は複数の執筆者が同じ図を見て解釈を検討することで、テーマを広げることができたし、解釈の妥当性も向上したと思います。

島本 ちょっとしたマテリアルな痕跡から刷り板の違いが判明したこともあり、技術の進歩もそれを後押ししてくれました。今回の調査では多くの地図をデジタル撮影したことで、原図調査の際も細部の比較が容易になりましたし、現物を調査できなかった図についてもデジタルデータを手に入れたので、細かい検討がやすくなったのは良かったです。

小野田 僕の若い頃とは相当環境が変わりました。かつては個人のコレクターが独自に研究していた、それはそれで成果もあったのですが、大勢の研究者が同じ資料をもと

に議論するという、かつての時代ではな

得な研究方法を実践できたんですね。

「モノ」としての地図の面白さ

島本 地図面だけでなく、袋の種類や料紙(印刷紙)の貼り合わせ方、折り方など、資料そのものに目を向けたことも、地図研究の中でははじめての試みではないでしょうか。

上杉 これまで地図研究者は地図面ばかりに価値を置いていたが、今回の調査を通して、「モノ」としての地図資料も重要な価値を判断できることもありました。板の継ぎ目を判断することもありました。

小野田 僕や大澤さんのような、日頃から博物館でまとまった数の現物資料を扱っている人間は、地図の素材や外側の形式の違いにも気がつきやすいのですが、学問研究としては、どうしても中身に目がいきますからね。

島本 内容に秀でず形式が重要ということですね。

小野田 解説編のコラム④でも取り上げましたが、折り畳んだ地図を取納する「袋」は大坂の風物を描いた絵や板元の広告が刷り込まれるなど、さまざまな意匠が凝らされていて、出版物、商品としてアピールするための工夫が感じられます。また同じ図なのに、折り方や表紙を愛でて別の地図として売ったりしている例もあつたんですね。あれは刷版の違いなのか、あるいは経師屋の違いなのか、理由は判然としませんが……。

コラム「刊行大坂図の袋から」冒頭頁



コラム「刊行大坂図の袋から」冒頭頁

島本 資料についても、普通に考えれば板木のサイズに合わせて作れば合理的で、たしかに幕末期には「長・長・短」と寸法の異なる紙を貼り合わせた形を並列に組み合わせたり、端切みした紙を要所要所に貼り合わせたタイプもありました。たしかに幕末期には「長・長・短」と寸法の異なる紙を貼り合わせた形を並列に組み合わせたり、端切みした紙を要所要所に貼り合わせたタイプもありました。たしかに幕末期には「長・長・短」と寸法の異なる紙を貼り合わせた形を並列に組み合わせたり、端切みした紙を要所要所に貼り合わせたタイプもありました。

小野田 ほかに板元の印刷紙のエンボス加工など、地図には物質的にも様々なバリエーションがあり、資料論的な研究がまだできていないと言えませんが、地図の表紙や袋の画像を掲載して問題提起できたことは良かったと思います。

論じていますが、網羅しきれなかったところもたくさんあります。これから地図史、少なくとも都市図をやるという人は、必ず本書の内容を消化して、研究をさらに発展させてほしいと願っています。

次は日本図集成をやりたい

上杉 今後も本書に載っていない新しい図が出てくると思います。今回の調査でも、板木の状態からしてきつとほかにバリエーションがあるはずだと思わせる系統が、いくつかありました。新種の地図が発見され、刊行大坂図の研究がどんどん進んでいくのが楽しみです。とはいえ、あまりにたくさん収録できていない図が出てくる、ちょっと悲しい気もしますが(笑)。

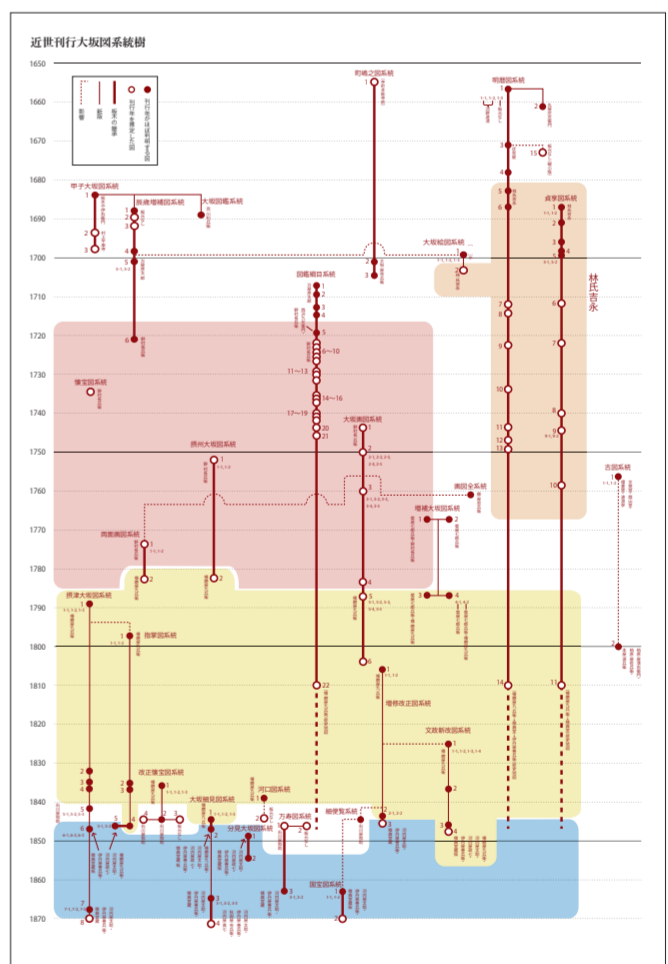
小野田 古本屋さん、骨董屋さんはぜひこの本を座右に置いて、古地図が手に入った本と照らし合わせて、同定していただきたいですね。お持ちの古地図がもしかしらなければ、それに刊行大坂図、個人でも手が出ないほど高額というわけではありませんが、古地図ファンの方は、ぜひ古本屋さんなどで本物を手に入れて、本書の地図と見比べてはいかがでしょうか。

上杉 大坂図だけでなく江戸図、京都図にしても、目録から漏れている図はいくらかあるでしょうし、それらをまた蓄積して、本が作れたらと思います。とはいえ、これで江戸図・京都図・大坂図と三大都市の目録はできたことだし、次は日本図の集成をやりたいですね。

小野田 日本図か、「日本図」はもっと大変やで(笑)。

島本 次はいついかなにかの年かかるといいますか(笑)。本に作るのかわかりませんが、「近世刊行大坂図集成」を眺めながら、気長にお待ちいただければと思います。

2016年4月8日(於 創元会議室)



インフォグラフィックとしての「近世刊行大坂図系統樹」

どうにも体系的な集成ができたこと、逆に入ります多くの謎やテーマが発掘された大坂図研究ですが、今後、この本を用いて、どのような分野での研究の展開が期待されるでしょうか。

小野田 さきほどは地図と歴史、経済、政治との関わりに触れましたが、時代が下るにつれ、海岸線が埋め立てられたり河川や土地が整備されて、新地として開発されていく過程が、地図には克明に記されている。また寺院や橋などの主要な建造物の変更もまた記されています。都市史、都市計画はもちろんだこと、土木建築や、地学、地理の分野にも活かせる情報がたくさん詰まっています。

島本 収録図の資料批判の点でも相当レベルアップしていますので、地図そのものの研究だけでなく、古地図から読み取れる多岐にわたる膨大な情報を、多くの分野で応用していただきたいですね。本書に収録した「近世刊行大坂図系統樹」と「書誌目録」が、重要な資料になることは間違いないと思います。「系統樹」は近世刊行大坂図の系譜を家系図の要領で視覚化したもので、各図の刊行時期や期間、バリエーションの多さ、新板や板木継承の関係、板元などが一目で確認できます。

小野田 この系統図は、本が三分かや四分か、インフォグラフィックには板元、刊行年、上杉、また「書誌目録」には板元、刊行年、推定出版年代などの基本的な書誌情報に加え、法量や板・彩色、所蔵機関などの資料情報、そして城代・定番・町奉行名や資料として扱う際に注目すべき点などの歴史的情報も網羅しており、地図、歴史研究にすぐ役立つデータベースになっています。

小野田 研究によって地図の解釈は変わってきますが、書誌データは解釈の基盤になる、非常に重要なものです。さまざまな研究・議論のために共有するべき、近世刊行大坂図に関する現時点での最大の基礎情報を整理統合し、その作業を通して見えてきた多くの問題提起を行ったということが、本書の最大の成果だと思います。

上杉 この本にはこれから地図をもとに研究をするすべての方にとって、研究のネタが山のように落ちていくので、僕らもできる限り論文や解説、コラムで拾い上げて

論じていますが、網羅しきれなかったところもたくさんあります。これから地図史、少なくとも都市図をやるという人は、必ず本書の内容を消化して、研究をさらに発展させてほしいと願っています。

次は日本図集成をやりたい

上杉 今後も本書に載っていない新しい図が出てくると思います。今回の調査でも、板木の状態からしてきつとほかにバリエーションがあるはずだと思わせる系統が、いくつかありました。新種の地図が発見され、刊行大坂図の研究がどんどん進んでいくのが楽しみです。とはいえ、あまりにたくさん収録できていない図が出てくる、ちょっと悲しい気もしますが(笑)。

小野田 古本屋さん、骨董屋さんはぜひこの本を座右に置いて、古地図が手に入った本と照らし合わせて、同定していただきたいですね。お持ちの古地図がもしかしらなければ、それに刊行大坂図、個人でも手が出ないほど高額というわけではありませんが、古地図ファンの方は、ぜひ古本屋さんなどで本物を手に入れて、本書の地図と見比べてはいかがでしょうか。

上杉 大坂図だけでなく江戸図、京都図にしても、目録から漏れている図はいくらかあるでしょうし、それらをまた蓄積して、本が作れたらと思います。とはいえ、これで江戸図・京都図・大坂図と三大都市の目録はできたことだし、次は日本図の集成をやりたいですね。

小野田 日本図か、「日本図」はもっと大変やで(笑)。

島本 次はいついかなにかの年かかるといいますか(笑)。本に作るのかわかりませんが、「近世刊行大坂図集成」を眺めながら、気長にお待ちいただければと思います。

2016年4月8日(於 創元会議室)

近世日本経済の中心として栄えた商工業都市大坂。その姿を木版に刻み込んだ刊行大坂図、30系統182種を体系的に収録解説。「論文×図解×複数の研究者」による多角的アプローチで従来の研究水準を一新する、決定版にして永久保存版。数多くの国内所蔵図を高解像デジタルカメラで新たに撮影、さらに米国・カナダ・オランダ各国所蔵の秀麗図も収録、研究に役立つことはもちろん、鑑賞にも耐え得る豪華大判。

●脇田修 [監修] 小野田一幸・上杉和央 [編集]

近世刊行大坂図集成

本書を推薦します(50音順・敬称略)

川村博忠 (東亜大学客員教授)

杉本史子 (東京大学史料編纂所教授)

数田 貴 (関西大学文学部教授・兵庫県立歴史博物館館長)

図録本・192頁・オールカラー/論文篇・96頁・モノクロ

総ページ数288頁

※数社ホームページからも閲覧できます。

定価(本体45000円+税)

神戸市立博物館蔵、菊全判折込仕様

2016年11月16日発行

創元社 <http://www.sogensha.co.jp/>

(本社) 大阪市中央区淡路町 4-3-6 TEL(06)6231-9010 代 FAX(06)6233-3111 (東京支店) 東京都新宿区神楽坂 4-3 煉瓦ビル TEL(03)3269-1051 代